

ZOCALO 2017 6 ▶ 7

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

畏れと歓喜の先にある感覚を目指して

遠藤利克展—聖性の考古学 2017年7月15日(土)→8月31日(木)

黒く焼け焦げた粗い木肌。円環を基本構造とするシンプルな形態。観るひとを圧倒する作品のスケール。とても粗野な見た目ながら、いわゆる言い難い魅力が感じられるのが彫刻家・遠藤利克(1950-)の作品です。遠藤はヴェネツィア・ビエンナーレなどの国際的な展覧会に出品し、北欧と英国では巡回展を行っているほか、国内では円空賞(2009年)を受賞するなど、国内外で極めて評価が高い彫刻家です。それにしても、ほとんど遠藤の代名詞のようにもなっている、焼き焦がした木の作品に感じられるあの「いわゆる言い難さ」は、一体何に由来しているのでしょうか?

炭化した作品の表面を通じて、観るひとは作品が一度炎に包まれたことを理解します。ここで単に「ああ、作品を火で焦がしたんだな」とだけ思って立ち去ってしまわずに、もう一歩、作家の制作意図に踏み込んでみる工夫をしてみましょう。そう、例えば目を閉じて、過去に自分が経験した、最も強く最も大きな炎のことを想像してみてください。激しく燃えさかる炎に、ひとは生命の危険を感じるものです。同時に、キャンプファイヤーのような大きな炎はひとの心を高揚させます。人間にとっての火の経験は、ひりひりとした危険の感覚とうっとりとした恍惚の感覚が表裏一体になったものであることに思い至るはず。



遠藤利克《空洞説(ドラム状の)-2013》2013年 作家蔵
宇都宮美術館での展示風景
撮影: 椎木静寧

畏れと歓喜がないまぜになったこうした感情の経験は、実は作品を観るひとに感じてほしいと遠藤が考える感覚にまっすぐにつながっています。

遠藤は、彼の世代に先行したミニマリズムや「もの派」の芸術観が理性に重きを置きすぎていると考え、美術には身体経験や感情などの要素がもっと必要だと考えていました。芸術の原理を問うことを重視した先行する動きに対して、遠藤は、一方では、現代美術が退けようとしてきた神話や物語のような要素を持ち込むことで、現代美術を再び活性化しようとしています。他方では、身体感覚を重視して観るひとを圧倒するようなスケールの作品を制作するのですが、それは作品の物理的な大きさというものが、やはり生命の高揚と畏れの感情とを同時に感じさせるものであるからです。火の痕跡や作品のスケールによって、遠藤の作品は観るひとの身体感覚や感情にダイレクトに働きかけてきますが、それは畏れと歓喜が一体となった感覚には、信仰にも通じるような「聖なるもの」の片鱗がある、と彫刻家が考えているからなのです。遠藤の作品のいわゆる言い難い魅力は、ある意味では、対立する感情が一度に喚起されてくるため、なかなか言葉にならないという事情に由来しているように思われ

ます。遠藤利克の作品には、実際に難解なところがあります。けれども、自分の身体感覚に正直に、火の魅力や怖さを思い起しながら作品に向き合うことで、彫刻家が目指す感覚に実感をもって迫ることができるのもまた事実です。この夏、企画展「遠藤利克展—聖性の考古学」と、一週間遅れで始まるMOMASコレクションの特集展示「遠藤利克—供儀の論理学」(会期7月22日(土)~10月11日(日))をあわせてご覧いただき、現代日本を代表する彫刻家である遠藤利克の世界をじっくりと堪能してほしいと思います。(T.S.)



遠藤利克《「東-9個からなる」写真1》1989年(プリントは1993年)
MOMASコレクション第2期に出品予定

さくねんのたまもの 平成28年度新収蔵作品のご紹介

レストラン前の木立の中にある彫刻が大きくなったことに気づいた方も多いかと思います。この28年度の購入作品、橋本真之《果実の中の木漏れ陽》の第三回増殖については、ソカロ増刊号で特集を組みましたので、美術館のホームページからご覧いただきたいと思ひます。

ご寄贈いただいた作品は、時代もジャンルも多彩なものとなりました。越谷生まれの斎藤豊作は、フランスの点描技法を日本に紹介した一人です。点描の油彩画は6点所蔵されていますが、ここに第1回二科展に出品された代表作《初冬の朝》が加わりました。MOMASコレクション第1期では本作と、同じく寄贈された《鯉(装飾画の下絵)》など、斎藤豊作の特集展示を行っています。



斎藤豊作《初冬の朝》1914年

「焼いた土」を意味するテラコッタという素焼きの彫刻で知られる、彫刻家の木内克(きのうちよし)の《トルソ》は、テラコッタの代表的な一点です。現代美術の先駆者・瑛九には、重要な評伝『瑛九』があります。この本の著者という印象の強かった山田光春でしたが、最近では瑛九と併走した制作者として再評価され始めました。瑛九のフォトデッサンとの関連をうかがわせるガラス絵や、瑛九との交友を伝えるスケッチブックなど貴重な資料も含まれています。

企画展「竹岡雄二 台座から空間へ」の出品作から、彫刻《プロトタイプII 背面補強》とこの作品のドローイングをご寄贈いただきました。椅子をテーマにしたこの作品は、まさに「椅子の美術館」にふさわしい作品といえるでしょう。(Y.M.)



山田光春《スケッチブック》より
(モデルは瑛九と推測される)
1934-35年



山田光春《Work》(ガラス絵)
1936-37年

今年が開館35周年、当館のメモリアル・イヤーにあたります。そのスペシャル企画に、美術評論家として知られる建畠 哲館長の眼でコレクションから作品を選び、紹介するコーナーを展示室の一角に設けました。美術評論家としてのみならず、詩人としても活動する建畠館長。ぜひ表現者としての側面を発揮し、当館の作品とコラボレーションするような形で、今回の展示をリクエストしました。

“美術と文学をコラボレーションさせる”ことを念頭に展示プランを考える中で館長が着目したのが、2月~5月に都内で過去最大規模の個展が開催され話題を集めた草間彌生さんの作品。当館のコレクションは限られた点数ながらも、草間芸術の魅力が凝縮されています。草間さんと館長は1993年のヴェネツィア・ビエンナーレでタッグを組んで以来、互いの芸術への情熱を尊敬しあう間柄です。草間さんとはご自身文学にも大きな足跡を残しており、建畠 哲

が手がける美術と文学のコラボレーションというテーマに対して、この上ない存在であるといえます。

そして今回の展示に合わせて館長が書き上げたのが、草間さんの作品に捧げる三篇の詩(「青蛇の目を持つ花瓶」「脚立と旅行鞆は“永遠にここにある”」「犬とハンドバッグ」)。圧倒的な力を持つ草間氏の作品とその作品にインスピレーションを得た三つの詩がコラボレートして、ここでしか見ることのできない独自の空間が立ちあられた「建畠 哲 × MOMAS コレクション 草間彌生」、どうぞお見逃しなく! (R.G.)



草間彌生《脚立》《スーツケース》1966年 ©YAYOI KUSAMA

2017年度 MOMAS コレクション第1期 スペシャル展示 「建畠 哲 × MOMAS コレクション 草間 彌生」

第67回埼玉県美術展覧会(県展)を5月30日(火)から6月21日(水)まで開催中です。県展会期中は、MOMAS コレクション観覧料が半額になります。